

# 柏崎発 医療最前線

国立新潟病院の研究

Ⓜ

## 肺の痰を痛みなく除去

### 自ら器具開発、年内量産

スプタバキューマー 痰を吸引するために吸引ポンプ側のホースと患者側とを接続する器具。鼻の穴に直接接触させたり、気管挿管チューブや気管カニューレ（喉を切開して取り付けた器具）に接続したりして使う。ポリプロピレン製で、清潔さを保つためのキャップやフックなども一体化され、洗って何度も使える。医療従事者だけでなく、介護職員や在宅で介護する家族でも痰を吸引できる。7月30日午後1時から新潟市中央区の新潟ユニゾンプラザで開かれる難病患者・家族の会合で、この器具のデモンストレーションがある。

患者にいったん酸素を十分に供給した上で、肺が絞りにくい状態になるまで空気を吸い出す。すると最後の数秒間で、肺の隅々にある痰が絞り出される。

ユープなどに挿入して痰を吸い出している。

石北さんは「挿入する医師

に供給した上で、肺が絞りにくい状態になるまで空気を吸い出す。すると最後の数秒間で、肺の隅々にある痰が絞り出される。

痰が肺にたまった患者を模したマネキン人形の鼻の穴に、直径2・4センチの透明な器具を当てる。この器具とホースでつながる吸引ポンプを動かすと、人形の胸部にある、肺をイメージした袋がしぼみ、中の水分が絞り出された。

この器具は、柏崎市赤坂町にある国立病院機構新潟病院の医師、石北直之さん(44)が開発した痰吸引チップ「スプタバキューマー」。鼻の穴に当てたり、口から気管に挿入されている「気管挿管チューブ」と接続したりして痰の除去を助ける医療器具だ。

肺の機能が弱っている患者は自分で痰が出せない。医療現場では、吸引カテーテルという細い管を鼻や気管挿管チ

### 吸引チップ「スプタバキューマー」

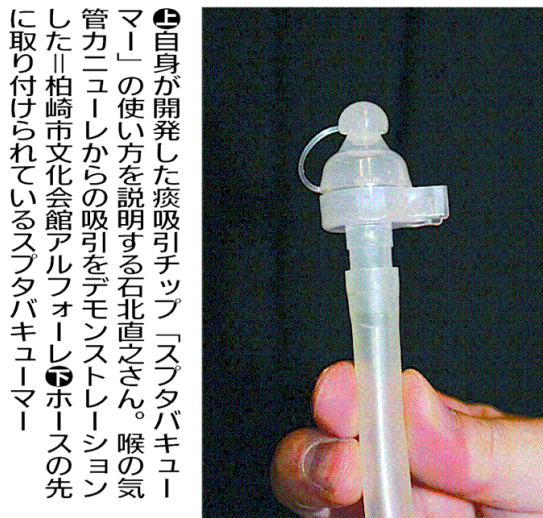
#### 医師 石北 直之さん(44)

痰除去の難しさは現場の負担にもなっていた。アラームが鳴って医師、看護師が痰を吸引しても十分に除去できず、数分後には再びアラームが鳴るといふ繰り返しだった。この器具は、柏崎市赤坂町にある国立病院機構新潟病院の医師、石北直之さん(44)が開発した痰吸引チップ「スプタバキューマー」。鼻の穴に当てたり、口から気管に挿入されている「気管挿管チューブ」と接続したりして痰の除去を助ける医療器具だ。

痰除去の難しさは現場の負担にもなっていた。アラームが鳴って医師、看護師が痰を吸引しても十分に除去できず、数分後には再びアラームが鳴るといふ繰り返しだった。この器具は、柏崎市赤坂町にある国立病院機構新潟病院の医師、石北直之さん(44)が開発した痰吸引チップ「スプタバキューマー」。鼻の穴に当てたり、口から気管に挿入されている「気管挿管チューブ」と接続したりして痰の除去を助ける医療器具だ。

痰除去の難しさは現場の負担にもなっていた。アラームが鳴って医師、看護師が痰を吸引しても十分に除去できず、数分後には再びアラームが鳴るといふ繰り返しだった。この器具は、柏崎市赤坂町にある国立病院機構新潟病院の医師、石北直之さん(44)が開発した痰吸引チップ「スプタバキューマー」。鼻の穴に当てたり、口から気管に挿入されている「気管挿管チューブ」と接続したりして痰の除去を助ける医療器具だ。

痰除去の難しさは現場の負担にもなっていた。アラームが鳴って医師、看護師が痰を吸引しても十分に除去できず、数分後には再びアラームが鳴るといふ繰り返しだった。この器具は、柏崎市赤坂町にある国立病院機構新潟病院の医師、石北直之さん(44)が開発した痰吸引チップ「スプタバキューマー」。鼻の穴に当てたり、口から気管に挿入されている「気管挿管チューブ」と接続したりして痰の除去を助ける医療器具だ。



自身が開発した痰吸引チップ「スプタバキューマー」の使い方を説明する石北直之さん。喉の気管カニューレからの吸引をデモンストレーションした。柏崎市文化会館アルフォーレホースの先に取り付けられているスプタバキューマー